

さいたまトリエンナーレ2016 プレスリリース

第1弾参加アーティストの発表
プレイメントのご案内

2015年10月6日

さいたまトリエンナーレ実行委員会

* 2015年8月28日(金)に開催された、さいたまトリエンナーレ実行委員会にて、さいたまトリエンナーレ2016参加アーティスト第一弾(28組)を発表いたしました。

アーティスト選定の考え方について

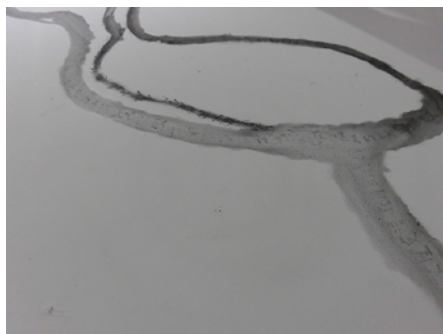
さいたまトリエンナーレ2016では、「アーティスト」を選ぶというより、「アートプロジェクト」を選ぶという考えに立っている。つまり、〈誰が〉はもちろん重要だが、その誰が〈何を〉するのかということこそが重要と考えている。現在はプロジェクトディレクターたちの協力のもと、「未来の発見!」というテーマに沿って、つまり今、ここで、さまざまな未来を夢見るのにふさわしいと私が直観する、信頼すべき国内外のアーティストたちを選び出し、彼らとプロジェクトの構想を組み立てている段階である。今回はそうしたアーティストたちのお名前の一部を発表する。

さいたまトリエンナーレ2016 ディレクター
芹沢 高志

参加アーティスト

アーティスト名 (和)	アーティスト名 (英)	生年(創設年)	出生地(創設地)	在住(活動拠点)
秋山さやか	AKIYAMA Sayaka	1971	日本	日本
アイガルス・ビクシェ	Aigars BIKŠE (Aigars BIKSE)	1969	ラトビア	ラトビア
チェ・ジョンファ	CHOI Jeong hwa	1961	韓国	韓国
藤城光	FUJISHIRO Hikari	1974	日本	日本
ダニエル・グェティン	Daniel GÖTTIN (Daniel GOETTIN)	1959	スイス	スイス
日比野克彦	HIBINO Katsuhiko	1958	日本	日本
ホームベース・プロジェクト	HomeBase Project	2006	アメリカ	アメリカ、イスラエル
磯辺行久	ISOBE Yukihisa	1936	日本	日本
日本相撲聞芸術作曲家協議会JACSHA (鶴見幸代、野村誠、樺山智子)	JACSHA (TSURUMI Sachiyo, NOMURA Makoto, MOMIYAMA Tomoko)	2008	日本	日本
川埜龍三	KAWANO Ryuzo	1976	日本	日本
オクイ・ララ	Okui LALA	1991	マレーシア	マレーシア
松田正隆	MATSUDA Masataka	1962	日本	日本
目 (南川憲二、荒神明香、増井宏文)	me (MINAMIGAWA Kenji, KOJIN Haruka, MASUI Hirofumi)	2012	日本	日本
向井山朋子	MUKAIYAMA Tomoko	非公表	日本	オランダ
長島確	NAGASHIMA Kaku	1969	日本	日本
新しい骨董 (山下陽光、下道基行、影山裕樹)	NEW ANTIQUE (YAMASHITA Hikaru, SHITAMICHI Motoyuki, KAGEYAMA Yuki)	2015	日本	日本
西尾美也	NISHIO Yoshinari	1982	日本	日本
野口里佳	NOGUCHI Rika	1971	日本	ドイツ
岡田利規	OKADA Toshiki	1973	日本	日本
大洲大作	OOZU Daisaku	1973	日本	日本
大友良英	OTOMO Yoshihide	1959	日本	日本
小沢剛	OZAWA Tsuyoshi	1965	日本	日本
ソ・ミンジョン	SEO Min-Jeong	1972	韓国	ドイツ
高田安規子・政子	TAKADA Akiko & Masako	1978	日本	日本
多和田葉子	TAWADA Yoko	1960	日本	ドイツ
マテイ・アンドラシュ・ヴォグリンチッチ	Matej Andraž VOGRINČIČ (Matej Andraz VOGRINCIC)	1970	スロヴェニア	スロヴェニア
アピチャポン・ウィーラセタクン	Apichatpong WEERASETHAKUL	1970	タイ	タイ
ユン・ハンソル	YOON Hansol	1972	韓国	韓国

参加アーティスト ※アルファベット順



〈2014年 11月6日朝 消化する 11月29日10時25分 上海〉(部分)
2014年、上海

秋山さやか AKIYAMA Sayaka

1971年、兵庫県生まれ。神奈川県在住。国内外のさまざまな土地を巡りつつ、その時の思いや出来事、出逢いなどを、色とりどりの縫い目に込めて、あるいは道のりの中に表現する美術作家。近年の主な展覧会に、「もずのはや贅」展(個展、Joshibi Art Gallery、上海、2014年)、「始発電車を待ちながら」(東京ステーションギャラリー、2012年)、「ベルリンー東京」展(ベルリン新国立美術館、2006年)など。主な収蔵先に、東京都現代美術館、霧島アートの森、新潟県立近代美術館など。フィリップモリスアートアワード大賞(2000年)、公益信託タカシマ文化基金・タカシマ美術賞(2010年)受賞。2015年、メゾンエルメスのショウウィンドウにて作品を展示中、また11月には「日産アートアワード 2015」(BankART Studio NYK、横浜)にて展示予定。



〈Some good things from Latvia for some good people in far-away Japan〉越後妻有アートトリエンナーレ2006

アイガルス・ビクシェ Aigars BIKŠE (Aigars BIKSE)

1969年、ラトビア・リガ生まれ。同在住。木、ブロンズ、石彫刻を素材とした彫刻作品を中心に、社会的なアイデンティティの確立や対立などを問題にするなど、場所やその土地の人々の暮らしを読み解きながら、様々な彫刻的なインスタレーション、アート・プロジェクトを行う他、空間デザインやオペラ、演劇など舞台芸術も数多く手がける。主な作品、展覧会、プロジェクト、ワークショップなどに、《ピンク・ハウス》(クリスタプス・グルビスとの共同プロジェクト、ヴェネチア・ビエンナーレ、ジェネレーション・ヨーロッパ館、イタリア、2005年)、《母なる地球のオフィスの1/10》(リガ中央墓地のためのクルサ通り2番地のオブジェ、ラトビア、2004年)、「ヨーロッパ的空間」(クリスタプス・グルビスと共同キュレーション、リガ国際彫刻四年祭、ラトビア、2002年~2004年)、他多数。



チェ・ジョンファ CHOI Jeong hwa

1961年、韓国生まれ。同在住。韓国を代表する現代アーティスト。アート・ディレクションやインテリア・デザインも手がけるなど多様な分野で国際的に活躍するチェは、日常の中から作品の着想を得て、韓国文化と密接な関係があるモチーフや街に溢れるイメージを用いながら、ダイナミックで非日常的な作品を作り上げ、普段は気づかない、物事の別の側面をユーモラスに浮かび上がらせる。アジア、ヨーロッパ、アメリカでの個展、グループ展参加多数。

<http://choijeonghwa.com>



〈深遠なる庭園にて〉2014年 © Kuniaki Murao

藤城光 FUJISHIRO Hikari

1974年、茨城県生まれ。福島県在住。埼玉大学教養学部卒業。「トーキョーワンダーサイトゼロ号」展、スパイラル「SICF」などに参加後、ギャラリーROCKETにて個展(2010年)、3331 Arts Chiyodaでのスタジオ制作(2010年~2011年)、西宮船坂ビエンナーレ(2012年)、いわきまちなかアートフェスティバル(2014年、2015年)、生野ルートダルジャン芸術祭(2014年)などに参加。移住したいわき市にて2011年春に震災と原発事故を体験し、ふくしまの人々の声に耳を傾けその姿や想いを残すプロジェクト「PRAY+LIFE」を開始。また、多くの分断を抱えた地域に対話の場をつくる活動「未来会議」の発起に関わっている。

<http://www.star-fish.jp> (hikari fujishiro)

<http://praylife.net> (pray+life)

参加アーティスト ※アルファベット順



《THE GO BETWEEN》2001年
©Haus für konstruktive und konkrete Kunst, Zürich; Daniel Götting,
Basel photo: Alexander Troehler



「種は船プロジェクト in さいたま」撮影：喜多直人



ホームベース・プロジェクト HomeBase Project

「HomeBase Project」は、非営利の移動型国際アーティスト・イン・レジデンス・プロジェクトで、アーティストのアナット・リトウィンにより 2006 年に創設。現代の社会状況の変化により生まれた空き家となった場所をアーティストの「家」と見立て、12名のアーティストが一定期間滞在し、様々な活動を行うことで、日常生活におけるアーティストおよび芸術の役割を発展させることを目的としている。これまでニューヨーク、ベルリン、エルサレムなど各開催国・地域のアーティスト、キュレーターとプロジェクトチームを編成し、レンガ倉庫、空きビル、歴史的建造物を舞台に過去 6 回のプロジェクトを実施。2015 年のさいたまトリエンナーレプレイバントでは、岩槻区でプロジェクトを展開する。



《土石流のモニュメント》越後妻有アートトリエンナーレ 2015

ダニエル・グエティン Daniel GÖTTIN (Daniel GOETTIN)

1959 年、スイス生まれ。同国バーゼル在住。インスタレーションやパブリックスペースでのアート作品設置、オブジェ、絵画など多岐に渡る制作を行う。粘着テープやペイントを用い、空間の中にシンプルな線や面を存在させることで、既存の景色や空間の魅力をさらに引き出し、変容させるような作品を制作する。国内外での個展、グループ展のほか、国際アートフェアへの出展、パブリックコレクション多数。

日比野克彦 HIBINO Katsuhiko

1958 年、岐阜市生まれ。東京都在住。東京藝術大学大学院修了。各地で地域の人々と制作を行い、社会でアートが機能する仕組みを追求。受け手の力に光を当てるアートプロジェクトを展開する。主なアートプロジェクトとして、「明後日朝顔プロジェクト」、「海底探査船美術館一昨日丸」、「アジア代表日本」など。現在、東京藝術大学先端芸術表現科教授、日本サッカー協会理事。

磯辺行久 ISOBE Yukihi

1936 年、東京都生まれ。同在住。1957 年、東京藝術大学美術学部卒業、アーティストとして活動の後、1965 年に米国にわたり、1968 年グリーン・カード（労働許可証）を取得、1972 年、ペンシルベニア大学大学院修了。エコロジカル・プランニングを修めた後、M・ポール・フリードバーグ環境設計事務所、ニューヨーク市公園課などにプランナーとして勤務、1975 年に（株）リジナル・プランニング・チームを設立。東京工業大学大学院、慶応大学環境情報学部、バリ大学 I、VIII などで講師を歴任。2000 年～2015 年まで越後妻有アートトリエンナーレに参加、信濃川をテーマとした野外作品を発表。2007 年、東京都現代美術館にて個展「サマー・ハプニング」開催。2013 年、瀬戸内国際芸術祭に《潮流の中の島々》で参加。2013 年、市原湖畔美術館にて個展「環境・イメージ・表現」開催。『エコロジカル・プランニングの方法と実践 I、II』（1975 年、1977 年、彰国社）など。

参加アーティスト ※アルファベット順



日本相撲聞芸術作曲家協議会 JACSHA

日本相撲聞芸術作曲家協議会（Japan Association of Composers for Sumo Hearing Arts、略して JACSHA＝ジャクシャ）とは ― 神事であり、芸能であり、スポーツであり、エンターテインメントであり、伝統であり、現代であり、文化であり、つまり智慧である相撲に耳を傾けること（相撲聞：すもうぶん）によって、新たな芸術を創造する作曲家の協議会。鶴見幸代、野村誠、樫山智子の3名を理事として 2008 年に設立。これまでに、「レッツ相撲ミュージック」（回向院）、「相撲聞芸術フォーラム」（谷中の家）、「相撲セミナー 相撲と芸術」（HAPS）、「相撲聞芸術のくろみ」（アサヒアートスクエア）などを開催。

■ 鶴見幸代 TSURUMI Sachiyo

1976 年、茨城県坂東市生まれ。沖縄県在住。作曲家。東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。コンサート音楽、合唱、映画音楽などを手がける。メンバーである作曲家グループ「クロノイ・プロトイ」が、佐治敬三賞受賞。鶴見幸代作品集 CD「eu canto..」をリリース（fontec）。企画、参加活動に、バス旅行とコンサートのイベント「はどバス」、願いごとが歌になるカフェ「ササノハ」、アーティスト・イン・レジデンス「はまみつくす」、エイブルアート・オンステージ「みつつのうたでドントカ」、世田谷パブリックシアター「地域の物語ワークショップ」ほか多数。野村流古典音楽保存会、琉球民謡音楽協会会員。

■ 野村誠 NOMURA Makoto

1968 年生まれ。作曲家。京都大学理学部卒業。小学校で相撲部に、中学校で落語研究会に所属。横浜トリエンナーレ 2005 では「ズーラシアの音楽」を、福岡アジア美術トリエンナーレ 2009 で「お湯の音楽会」を、あいちトリエンナーレ 2010 で「プールの音楽会」を発表。千住だじゃれ音楽祭ディレクターで、2014 年に「千住の 1010 人」を発表し、1010 人で演奏した。現在、日本センチュリー交響楽団コミュニティプログラムディレクターとして、オーケストラの新たな可能性を探索中。CD に「ノムラノピアノ」（とんつーレコード）、「瓦の音楽」（淡路島アートセンター）などがある。著書に、『音楽の未来を作曲する』（晶文社）ほか多数。

■ 樫山智子 MOMIYAMA Tomoko

1977 年、福井県生まれ、ニューヨーク / カリフォルニア育ち、東京在住の作曲家。スタンフォード大学にて作曲と文化心理学を二重専攻し卒業。文化庁新進芸術家派遣制度によりオランダ王立ハーグ音楽院作曲科留学。共同作曲作品「21 世紀の子守唄」（金沢 21 世紀美術館）、観客参加型のツアー演劇「東京境界線紀行『ななつの大罪』」（マイノリマジオリテ・トラベル）、サウンド・インスタレーション「チャンタンの高原から」（インド Earth Art 芸術祭）、マルチメディア・パフォーマンス「人類が絶滅するころに」（南アフリカ Unyazi 電子音楽祭）、ラジオ作品「桜の木の下で、時をみた」（フランス国立視聴覚研究所 INA-GRM）など、国内外の各地で分野を横断するサイトスペシフィックなプロジェクトを展開している。

川埜龍三 KAWANO Ryuzo

1976 年、神戸市生まれ、岡山県笠岡市在住。独学で美術制作を学び、10 代の頃よりジャンルや素材に囚われない多様な作品スタイルと優れた造形力を持っている。作品の世界観を再現する空間演出を得意とし、そのため自ら制作した音楽と共に作品発表も行う。インディペンデント・アーティストとして 2008 年に岡山県倉敷市に自身のギャラリー「ラガルト」を開設以降は常設で新旧の作品を公開しながら新しい企画や作品を生み出し続け、既存の価値観に左右されない独自の芸術活動を続けている。近年は個展での作品発表のほか、パブリックワークとして瀬戸内海を舞台に全国 2 千人の有志と共同制作した個人企画《犬島の島犬》（2012 年）など、特定の地域の歴史を掘り起こし、象徴的な造形作品と市民を巻き込む制作プロセスでその土地に眠る伝説を可視化する手法をとっている。



《犬島の島犬》2013 年 ©Ryuzo KAWANO All rights reserved

参加アーティスト ※アルファベット順



《Let's Drink and Eat Tea!》2015年

オクイ・ララ Okui LALA

1991年、マレーシア生まれ。同国ペナン島在住。写真やビデオ、インスタレーションを用いて、作品を発表。クアラルンプールにあるマルチメディア大学でメディアアートを専攻の後、様々なメディアを用いた作品を発表。人や地域への取材を通して作品づくりを行う。近年、子ども向けワークショップのファシリテーターとしても活動を開始。

これまで、「The Good Malaysian Woman Group Exhibition」でインスタレーション作品《Sewing Sew Eng》(2014年)やペナン島ジョージタウンにて団地を使った「People's Court」プロジェクトで《It takes a decade to grow a tree, a century to shape mankind》(2014年)、ペナン州立美術館にてミャンマー移民について取材した《Let's Drink and Eat Tea!》(2015年)などを発表。



「PARK CITY」2009年 撮影：丸尾隆一(YCAM)

松田正隆 MATSUDA Masataka

1962年、長崎県生まれ。東京都在住。マレビトの会代表。1996年『海と日傘』で岸田國士戯曲賞、1997年『月の岬』で読売演劇大賞作品賞、1998年『夏の砂の上』で読売文学賞受賞。2003年より演劇の可能性を模索する集団「マレビトの会」を結成。主な作品に「cryptograph」(2007年)、「声紋都市ー父への手紙」(2009年)、写真家笹岡啓子との共同作品「PARK CITY」(2009年)、「HIROSHIMA-HAPCHEON：二つの都市をめぐる展覧会」(2010年)、「アンティゴネーへの旅の記録とその上演」(2012年)、「長崎を上演する」(2015年)などがある。

目 me

個々のクリエイティビティを特性化し、連携を重視するチームによる芸術活動。

中心メンバーは、ディレクターの南川憲二、アーティストの荒神明香、制作統括の増井宏文の3名。果てしなく不確かなこの世界の可能性を信じ、その先に鑑賞者の実感を引き寄せようとする作品を展開している。代表作に「状況の配列」(三菱地所アルティウム、2014年)、「たよりない現実この世界の在りか」(資生堂ギャラリー東京、2014年)《おじさんの顔が空に浮かぶ日》(宇都宮美術館館外プロジェクト2014)。

■ 南川憲二 MINAMIGAWA Kenji

1979年、大阪府生まれ。埼玉県在住。ディレクター。2009年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。アート作品のアイデアを一般募集し参加と実現に移す表現活動 wah document (わうどきゅめんと) を立ち上げ、各地で活動を展開。

<http://wah-document.com>

■ 荒神明香 KOJIN Haruka

1983年、広島県生まれ。埼玉県在住。アーティスト。2009年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。アメリカ、ブラジルなど、国内外で作品を発表。日常の風景から直感的に抽出した「異空間」を美術館等の展示空間内で現象として再構築するインスタレーション作品を展開。瀬戸内国際芸術祭、犬島にて常設展示中。

■ 増井宏文 MASUI Hirofumi

1980年、滋賀県生まれ。埼玉県在住。制作統括。2008年、佛教大学教育学部資格課程修了。2009年～2014年、京都造形芸術大学非常勤講師。wah document 運営メンバーとして活動。多数の現場づくりや、ワークショップファシリテーション、幅広い制作活動を行う。



「たよりない現実 この世界の在りか」2014年 資生堂ギャラリー
photo: Ken KATO

参加アーティスト ※アルファベット順



《Multus #2》

向井山朋子 MUKAIYAMA Tomoko

和歌山県生まれ。オランダ・アムステルダム在住。ピアニスト・美術家。1991年にオランダの国際ガウデアムス演奏家コンクールで優勝して以来、ピアニストとして、国際的に活動するオーケストラなどと共演するほか、映画監督、デザイナー、建築家、写真家、振付家らとのコラボレーションを行う。近年は美術家としても活動、《for you》(横浜アートトリエンナーレ2005)、《you and bach》(シドニー・ビエンナーレ、2006年)、《wasted》(越後妻有アートトリエンナーレ2009)、《Nocturne(夜想曲)》(瀬戸内国際芸術祭2012)、《Falling》(あいちトリエンナーレ2013)などでインスタレーション作品を発表。近年の日本での発表作品はコンサートシリーズ《Multus》(2011年～2013年)やダンス作品《シロクロ》など。2007年、向井山朋子財団をオランダに設立、2015年には日本で一般社団法人〇+(マルタス)を設立し、プロデュースの分野でも活躍。音楽のみならず美術、建築、ファッション、ダンス、写真など幅広い分野とのコラボレーションで独創性を発揮している。



《豊島区在住アトレウス家》2011年 撮影：富田了平

長島確 NAGASHIMA Kaku

1969年、東京都生まれ。同在住。日本におけるドラマトゥルクの草分けとして、さまざまな演出家・振付家の作品に参加。近年は演劇の発想やノウハウを劇場外へ持ち出すことに興味をもち、アートプロジェクトにも積極的に関わる。今回は佐藤慎也(日大建築)、藤谷香子(FAIFAI)、宮武亜季(居間 theater)らとチームを組んで参加。ミクストメディア・プロダクト代表、中野成樹+フランケンズ所属。最近の参加プロジェクトに、「アトレウス家」シリーズ、「長島確のつくりかた研究所：だれかのみたゆめ」(東京アートポイント計画)、「四谷雑誌集+四家の怪談」(中野成樹演出、F/T13)、「羅生門」藪の中(坂田ゆかり演出、F/T14)、「ザ・ワールド」(大橋可也&ダンサーズ)、「おぼけ教室」(ソトフラ、としまアート夏まつり)ほか。



《裏輪呑み》2015年

新しい骨董 NEW ANTIQUE

東京、長崎、名古屋など、異なる土地で活動するメンバーが、まちやネットに溢れる「新しい骨董」とでもいうべき何か」を探索し、語りあうバーチャルな実験室。その活動はHP上で逐次更新されている。
<http://atarashiikotto.com>

■ 山下陽光 YAMASHITA Hikaru

1977年、長崎県生まれ。同県大村市在住。高円寺の古着屋「素人の乱シランブリ」元店主。「途中でやめる」という名前の服を発表するかたわら、戦後原爆ドームの前に出来たアトム書房の調査など、インターネットに転がるユニークな情報を探り、現代に接続する様々な活動を行っている。

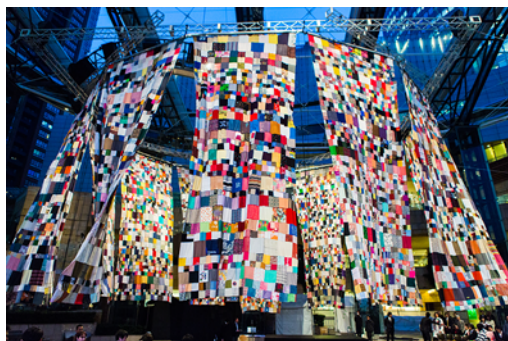
■ 下道基行 SHITAMICHI Motoyuki

1978年、岡山県生まれ。名古屋在住。2001年武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業。写真や文章を表現手段に、モノ／コトの残り方／消え方や、目の前に広がる風景の在り方に興味を持ち、旅やフィールドワークをベースに、数多くの展示や出版等で表現を続けている。

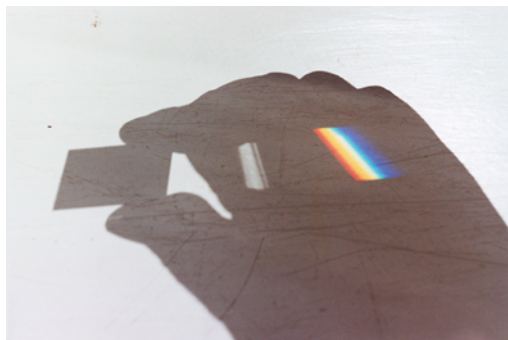
■ 影山裕樹 KAGEYAMA Yuki

1982年、東京都生まれ。豊島区在住。雑誌編集部、出版社勤務後フリーに。数々のアート&カルチャー書の出版プロデュース・編集を行う傍ら、近年は各地の芸術祭やアートプロジェクトに編集者として関わっている。著書に『大人が作る秘密基地』など。

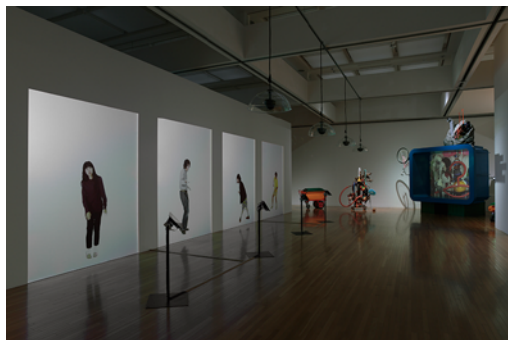
参加アーティスト ※アルファベット順



《人間の家「スカート」》2014年 photo: Koji Shimamura



《手と虹》2010年



《4つの瑣末な 駅のあるある》2014年
東京都現代美術館における展示風景 撮影: 椎木静寧



《光のシーケンス》より ©Daisaku OOZU

西尾美也 NISHIO Yoshinari

1982年、奈良県生まれ。同在住。2011年、東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。文化庁芸術家在外研修員(ケニア共和国ナイロビ)などを経て、現在、奈良県立大学地域創造学部専任講師。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目し、市民や学生との協働によるプロジェクトを国内外で展開。アフリカと日本をつなぐアートプロジェクトの企画・運営の他、ファッションブランド FORM ON WORDSも手がける。主な個展に、京都服飾文化研究財団 KCI ギャラリー(2006年)、3331ギャラリー(2011年)など。主なグループ展に、「Media City Seoul」(ソウル市立美術館、2006年)、「日常の喜び」(水戸芸術館、2008年)、越後妻有アートトリエンナーレ 2009、Biennale Benin(ベナン、2012年)、「LIFE by MEDIA」(YCAM、2013年)、六本木アートナイト2014、「拡張するファッション」(水戸芸術館、2014年)、「服の記憶」(アーツ前橋、2014年)、「Invisible Energy」(ST PAUL St Gallery、ニュージーランド、2015年)など。

野口里佳 NOGUCHI Rika

1971年、埼玉県生まれ。2004年よりドイツ・ベルリン在住。1994年、日本大学芸術学部写真学科卒業。1995年、日本大学大学院芸術学研究科中退。大学在学中より写真作品の制作を始め、以来国内外で展覧会を中心に活動している。2002年、第52回芸術選奨文部大臣新人賞、2014年、第30回東川賞国内作家賞を受賞。主な個展に「予感」(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2001年)、「飛ぶ夢を見た」(原美術館、2004年)、「光は未来に届く」(IZU PHOTO MUSEUM、2011年〜2012年)など、主なグループ展に「シャルジャ・ビエンナーレ 8」(シャルジャ美術館、アラブ首長国連邦、2007年)、「第55回カーネギー・インターナショナル」(カーネギー美術館、アメリカ、2008年)、「光 松本陽子/野口里佳」(国立新美術館、2009年)、ヨコハマトリエンナーレ 2011などがある。国立近代美術館、グッゲンハイム美術館、ボンビドウセンターなどに作品が収蔵されている。

岡田利規 OKADA Toshiki

1973年、横浜市生まれ。熊本県在住。演劇作家、小説家、チェルフィッチュ主宰。活動は従来の演劇の概念を覆すとみなされ国内外で注目される。2005年、『三月の5日間』で第49回岸田國土戯曲賞を受賞。同年7月『クーラー』で「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2005 一世代を担う振付家の発掘」最終選考会に出場。2007年、デビュー小説集『わたしたちに許された特別な時間の終わり』を新潮社より発表し、翌年第二回大江健三郎賞受賞。2012年より、岸田國土戯曲賞の審査員を務める。2013年には初の演劇論集『遊行 変形していくための演劇論』、2014年には戯曲集『現在地』を河出書房新社より刊行。2016年よりドイツ有数の公立劇場ミュンヘン・カンマーシュピーレ(ドイツ)のレパートリー作品の演出を3シーズンにわたって務めることが決定している。

大洲大作 OOZU Daisaku

1973年、大阪生まれ。横浜市在住。写真をメディウムとし、風景に人の営みを見る。見慣れた通勤の車窓や旅先で寄り添うように見える車窓にうつろい滲む、営みをうつす風景に光と影を見出す《光のシーケンス》、また、前後しつつ連続する車窓に、路線が縫う風土をひろく捉える《パノラミックウィンドウ》などを制作している。近年の主な展覧会に、「光路」(サイギャラリー、2015年)、「光のシーケンス」(個展、ギャラリー・バルク、2014年)、「始発電車を待ちながら」(東京ステーションギャラリー、2012年)など。主なイベントに「SlideShowStudies vol.4」(企画: 平田剛志、2015年)、「フィールドワーク・セッション #1 大洲大作」(企画: 松田法子、2014年)など。2015年末、青森県立美術館企画「FLY ME TO THE AOM (仮称)」にて作品制作予定。

参加アーティスト ※アルファベット順



「千住フライングオーケストラ」



《あなたが誰かを好きのように、誰もが誰かを好き》撮影：青木兼治



《Sum in a Point of Time - Existence》Espace Louis Vuitton Tokyo
Work with the support of Espace Louis Vuitton Tokyo
©LOUIS VUITTON / Jérémie Souteyrat



《庭園迷路》2010年

大友良英 OTOMO Yoshihide

1959年、横浜市生まれ。東京都在住。音楽家。ギタリスト、ターンテーブル奏者、作曲家、映画音楽家、プロデューサー。10代を福島市で過ごす。即興演奏やノイズ的な作品からポップスに至るまで、世界中で多種多様な音楽をつくり続けている。さまざまな背景を持つ人たちとの協働による参加型プロジェクトにも力をいれており、2011年の東日本大震災を受け「プロジェクト FUKUSHIMA!」を立ち上げるなど、音楽におさまらない活動でも注目される。近年は「アンサンブルズ」と名付けたコラボレーションを軸に展示する音楽作品や特殊形態のコンサート、また、ターンテーブルを用いたインスタレーションなどにより、美術の分野においても高い評価を得ている。2012年、芸術選奨文部科学大臣賞芸術振興部門、2013年、東京ドラマアウォード特別賞、レコード大賞作曲賞他数多くの賞を受賞。

小沢剛 OZAWA Tsuyoshi

1965年、東京都生まれ。埼玉県在住。美術家。東京藝術大学在学中から、風景の中に自作の地蔵を建立し、写真に収める《地蔵建立》開始。1993年から牛乳箱を用いた超小型移動式ギャラリー《なすび画廊》や《相談芸術》を開始。1999年には日本美術史の名作を醤油でリメイクした《醤油画資料館》を制作。2001年より女性が野菜で出来た武器を持つポートレート写真のシリーズ《ベジタブル・ウェポン》を制作。2004年に個展「同時に答えろYesとNo!」(森美術館)、2009年に個展「透明ランナーは走りつづける」(広島市現代美術館)を開催。2012年より東京藝術大学美術学部先端芸術表現科准教授。

ソ・ミンジョン SEO Min-Jeong

1972年、韓国・釜山生まれ。ドイツ・ベルリン在住。ソウルの弘益大学と東京の多摩美術大学大学院で版画を学んだ後、2003年から2008年までドイツのシュトゥットガルト州立アカデミーで美術を学ぶ。母国である韓国に加え、日本、ドイツでの学びや経験を通して多文化的で普遍的な視点を併せ持ち、版画や陶芸、ファインアートの分野における豊富な知識を活かし、多様な素材を用いて、ドローイング、映像、写真や彫刻から立体作品、インスタレーションにいたる様々な媒体の作品制作を行っている。2014年にはエスパス・ルイヴィトンにてオープンアトリエ形式での展覧会「IN SITU - 1」を開催。

高田安規子・政子 TAKADA Akiko & Masako

共に1978年、東京都生まれ。同在住。一卵性双生児のユニットで制作活動している。身近なものに手を加えることで、モノの大きさの尺度、時間の認識に問いを投げかける作品を発表している。ロンドン大学スレード校美術学部修士課程修了後、2010年「クリテリウム 78」(水戸芸術館現代美術ギャラリー)、[BigMinis] (ポルドー現代美術館)、2013年「セカイがハンテンし、テイク」(川崎市市民ミュージアム)、2014年「MOT アニュアル 2014 フラグメントー未完のはじまり」(東京都現代美術館)、2015年「燕子花と紅白梅 光琳アート 光琳と現代美術」(MOA美術館)、「春をまちながら」(十和田市現代美術館)、「線を聴く」(銀座エルメスフォーラム)に参加。

参加アーティスト ※アルファベット順



多和田葉子 TAWADA Yoko

1960年、東京都中野区生まれ。1982年よりドイツ在住。都立立川高校、早稲田大学第一文学部ロシア文学科卒業。チューリッヒ大学博士課程修了。1993年、『犬婿入り』で芥川賞、2003年、『容疑者の夜行列車』で谷崎潤一郎賞受賞。ドイツ語で書いた作品が1996年、シャミッソー賞、2005年、ゲーテ・メダル受賞。著作はフランス語訳5冊、英訳4冊の他にも、アジア、ヨーロッパの多くの言語に訳されている。また20か国以上で総計800回以上の朗読会及びパフォーマンスを行っている。

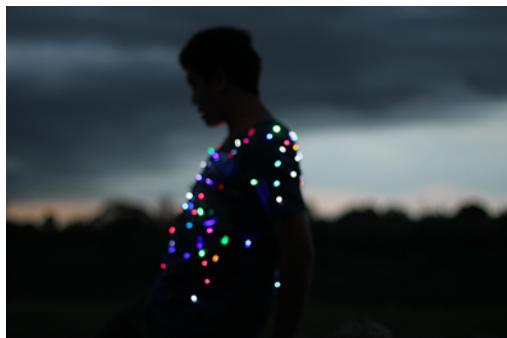


《Moon Plain》2002年 オーストラリア

マテイ・アンドラシュ・ヴォグリンチッチ

Matej Andraž VOGRINČIČ (Matej Andraz VOGRINCIC)

1970年、スロヴェニア・リュブリャナ生まれ。同在住。1990年代初めから、都市や自然環境の中でサイトスペシフィックな作品制作を行う。普段は見過ごされがちでありふれた場所をさらにありふれた素材で埋めつくすという手法で、それぞれの地域や伝統、歴史の特有性を視覚化し、国際的な評価を得てきた。地域のコミュニティとの直接的なやりとりから作品制作を行う。主な作品発表は、1999年ヴェネチア・ビエンナーレ、2006年リヴァプール・ビエンナーレ、2010年中国上海万国博覧会スロヴェニアパヴィリオンなど。



Stills from 《For Tomorrow and For Tonight》
Courtesy of Kick the Machine Films

アピチャップン・ウィーラセタクン

Apichatpong WEERASETHAKUL

1970年、タイ・バンコク生まれ。同国チェンマイ在住。母国で建築を学び、シカゴ美術館附属シカゴ美術学校で映画制作の修士課程修了。後に同校より名誉博士号授与。1990年代より美術と映画の両分野で活動。個人の記憶と社会の記録を交錯させたアートを各地で発表。2010年監督作『ブンミおじさんの森』がカンヌ国際映画祭パルムドール(最高賞)受賞。日本とのつながりも深く、2013年福岡アジア文化賞受賞。2014年、京都市立芸術大学ギャラリーで大規模な個展を開催。2016年には新作映画『Cemetery of Splendour』公開と美術展での発表を控える。埼玉県では2007年 SKIP シティ映像ホールで特集上映が行われている。



ユン・ハンソル YOON Hansol

1972年、韓国生まれ。同国在住。コロンビア大学大学院で演劇を学ぶ。2006年からグリーンピグの芸術監督をつとめる。2007年、「私は嬉しい」で文芸振興基金新人アーティストに選定される。2010年にはソウル・マージナル・シアター・フェスティバルにおいて「ステップメモリーズー抑圧されたものの帰還」を発表。同じく2010年に発表した「人は人に狼」で国立劇場フェスティバルの優秀演劇に選ばれるなど、近年、韓国で最も動向が注目される演出家の一人。2013年、シークレット・フレンドにて「イヤー・オブ・ヤング・シアター・アーティスト」を受賞。2015年京都アートセンターで「国家」を発表。現在、檀國(ダングク)大学校教授。

2015 年度開催のイベント

■「小沢剛：

あなたが誰かを好きなように、誰もが誰かを好き」 さいたま版

巨大な山に、100枚以上のおふとんが重ねられた、通称「ふとん山」。現代美術家の小沢剛氏が子どもたちのために作ったこの作品は、2005年にオーストラリアのブリスベンで公開されて以来、バンコク、東京、広島市、愛知県豊田市、福島市、香川県丸亀市、そして今年は福島県いわき市、千葉縣市原市を旅し、各地で大人気を博してきました。さいたまでは2体の「ふとん山」が出現します。「ふとん山」は登ったり、滑ったりして、自由に遊ぶことができます。同時に、自分が描いた大好きな人の絵を、見知らぬ誰かに届けてくれる「ポスト」でもあります。どうぞ大好きな人への思いを絵に描いて、山頂のポストに投函してみてください。絵は会場に展示された後、作家と一緒に次の開催地に旅立ちます。遊びと、純粋に誰かを好きな気持ちとがひとつの体験となり、見ず知らずの土地で暮らす子どもたちが次々につながっていきます。

※「ふとん山」は子どもたちのための作品ですが、どなたでも登ってお楽しみいただけます。



小沢剛「あなたが誰かを好きなように、誰もが誰かを好き」 写真：青木兼治

開催日時	10月2日(金)～12日(月・祝) 10:00～17:00
会場	さいたま市プラザノース ノースギャラリー 8 (さいたま市北区)
参加	無料／申し込み不要
	※10月7日(水)は閉場
	※「大人だけのふとん山ナイト!」は18:00～20:00開場

会期中のイベント

A 大人だけのふとん山ナイト!

「ふとん山」では、ふだんは子どもが主役。けれども本当は大人だって、思い切りゴロゴロして遊びたい。そんな夢を叶えるため、夜もふとん山を開放します。この時間帯は基本的に大人のみご参加いただけます。

開催日	10月2日(金)、3日(土)、11日(日) 18:00～20:00
参加	無料／申し込み不要

B ナイトトーク1：ふとん山で、さいたまの地形を語り尽くそう

2つのふとん山により、会場には谷地も生まれることになります。谷や窪地などの凹みを「スリバチ地形」と名づけて、研究している皆川典久氏をお招きし、地形が教えてくれる歴史の痕跡や街並みの成り立ち、場所が持つ潜在的な記憶の読み解き方についてお話いただきます。

開催日	10月9日(金) 18:00～19:30
参加	無料／申し込み不要／当日先着順
ゲスト	皆川典久(東京スリバチ学会 会長)
定員	30名
進行	三浦匡史(さいたまトリエンナーレ2016 プロジェクトディレクター)

C ナイトトーク2：おふとんと芸術祭の未来

小沢剛氏に、これまでのふとん山が辿ってきた旅路を中心に、過去の作品についてお話いただくとともに、今の時代にさいたまで芸術祭を開催することの意味について語り合います。

開催日	10月10日(土) 18:00～19:30
参加	無料／申し込み不要／当日先着順
定員	30名
ゲスト	小沢剛(美術家)
進行	芹沢高志(さいたまトリエンナーレ2016 ディレクター)

D ワークショップ「かみぶくろのくにへようこそ」

小沢剛氏と一緒に、紙袋を着たり履いたり被ったりして「ふくろ族」になってみよう! 何の変哲もない紙袋が、帽子や服になったり、トンネルになったり。最後にはふくろ族みんなで「ふとん山」会場にも飛び込みます。

開催日	10月11日(日)
	午前の部 10:00～12:00 / 午後の部 14:00～16:00
場所	さいたま市 プラザノース 2F 交流スタジオ
参加	無料／要申し込み／先着順
定員	各回10名
対象	小学生以下(未就学児は要保護者同伴)
講師	小沢剛(美術家)



2015年度開催のイベント

■ HomeBase Project SAITAMA 2015

さいたま市独自のアーティスト・イン・レジデンス (AIR) のあり方を探る実験的なプロジェクト。「HomeBase Project (HB)」とは、人々にとって「家 (Home)」とは何かを探究する移動型国際 AIR で、これまでニューヨーク、ベルリンなどの各都市において、空きビル、倉庫、集合住宅等を拠点に滞在制作と発表を行ってきました。プレイベントでは、国内外のアーティスト 6 名が、1 か月にわたり市内に滞在し、様々なアート表現を試み、その成果を発表します。

開催日	10月30日(金)～11月27日(金) [公開プログラム：11月20日(金)～24日(火)]
会場	さいたま市岩槻区内
参加アーティスト	エイドリアン・ブリュン Adrian BRUN (アルゼンチン／オランダ) 潘逸舟 HAN Ishu (中国／日本) 飯島浩二 IIJIMA Koji (日本) パリ・レガキス Paris LEGAKIS (ギリシャ) アナト・リトウィン Anat LITWIN (アメリカ／イスラエル) 三田村光土里 MITAMURA Midori (日本)

■ マイクロレジデンス・ネットワーク・フォーラム 2015

世界中で活動が行われているアーティスト・イン・レジデンス (AIR) の現在を知るため、国内外の AIR ディレクター、アーティストを招いたフォーラム。中でも「マイクロレジデンス」(小規模で質の高い AIR) に焦点をあて、教育的活動や地域課題への取り組み、国際ネットワークなどの多様な活動報告を行い、今後のさいたま市独自の AIR とは何かを参加者とともに考える機会とします。

開催日・会場	11月22日(日)	国際交流基金日本語国際センター(さいたま市浦和区)
	11月23日(月・祝)	岩槻駅東口コミュニティセンター(さいたま市岩槻区)

■ さいたまトリエンナーレ2016トークイベント

さいたまトリエンナーレや、さいたまにゆかりのある各界の方々とディレクターによるトークイベント。ゲストには、2015年度中にプロジェクト制作に取り組むアーティストや、アートに造詣が深い様々な分野の著名な方をお招きし、さいたまの魅力、アートの魅力、さいたまトリエンナーレの試みや期待、見どころ、それぞれのプロジェクトなどについて語り合います。

開催時期	2016年1月～3月(予定)
------	----------------

■ さいたまスタディーズ

未来の発見とは、実は自分たちが住む場所の発見でもあります。さいたまトリエンナーレを実行していく上で「土地の理解」を重要な出発点と考え、地形、地質、植生、気象、歴史、文化など多方面から、さいたま市を横断的、即地的に見渡す調査研究を、アートプロジェクトに先行して行います。2015年6月より、研究会(自由参加)を開催しており、9回の研究会の開催後、10月27日(火)から6回にわたる連続セミナーにおいて成果を発表します。

開催日・会場	10月27日(火)	18:30～21:00	浦和コミュニティセンター(さいたま市浦和区)
	11月24日(火)	18:30～21:00	市民会館おおみや(さいたま市大宮区)
	12月7日(月)	18:30～21:00	岩槻駅東口コミュニティセンター(さいたま市岩槻区)
	2月5日(金)	18:30～21:00	武蔵浦和コミュニティセンター(さいたま市南区)
	2月20日(土)	14:00～16:30	浦和コミュニティセンター(さいたま市浦和区)
	3月19日(土)	14:00～16:30	コクーンシティ コクーン2(さいたま市大宮区)



「さいたまトリエンナーレ2016」とは

126万人が生活するさいたま市に、世界に開かれた創造と交流の現場をつくりだすことを目指す国際芸術祭。テーマは「未来の発見!」。アートを鑑賞するだけでなく、共につくる、参加する芸術祭です。まちの成り立ちや知られざる自然、土地の歴史など、生活都市ならではの魅力が見える、市内のさまざまな場所が会場となります。国内外のアーティストたちが発見する、多様で多彩なさいたま。市民の皆さん、観客の皆さんとともに、自分たちのこれからの未来を発見していきます。2015年度はプレイベントとして、本番となる2016年に繋がるプロジェクトを市内各所で展開します。

会期：2016年9月24日(土)－12月11日(日)〔79日間〕

【 今後の予定 】

第2回記者発表会 2016年3月(予定)

開催約半年前に、参加アーティスト第2弾および具体的なアートプロジェクトを発表します。

【 一般の方向けお問い合わせ先 】

さいたまトリエンナーレ実行委員会事務局

(さいたま市 スポーツ文化局 文化部 文化振興課 トリエンナーレ係)

住所： 埼玉県さいたま市浦和区常盤六丁目4番4号

電話： 048-829-1225

ファクス： 048-829-1996

メールアドレス： bunka-shinko@city.saitama.lg.jp

【 報道関係者向けお問い合わせ先 】

さいたまトリエンナーレ実行委員会事務局 広報担当(N and A 内)

電話： 03-5545-3612

ファクス： 03-5545-3611

メールアドレス： press@saitamatriennale.jp

【 公式ウェブサイト 】

さいたまトリエンナーレ公式ウェブサイト

<http://saitamatriennale.jp>